

## 蟬丸 二題

一

さても藤原の定家撰びたる百人一首の中で、坊主であるかあらざるか、

蟬丸こそはあやしけれ。

そも蟬丸は延喜帝の皇子と聞こえし琵琶の上手。月の影は天にかかつて

万水の底に沈むが如く、都の東端、山城近江の国境、逢坂の関に住まい居て、これやこの行くも帰るも別れては、上りては下る坂道の、逢坂の、神と祀れる者なりしが。

蟬丸はひとり闇の中、

めぐる月日もたつ秋風になびく浅茅の末ごとに置く白露のあはれ世の中、

世の中はとてまかくても同じこと宮も藁屋も限りなければ、

と詠いつる間も山おろし、花も千草も散り散りに、なれど心は残りけり。

なれど心を残しけり。

二

こんな良き夜を語り過いさん

好む道なれば逢うぞうれしき